

行政はリスクの情報早く

社会福祉法人南幌苑理事長

栗林 和史 さん(65)

コロナに
負けない

⑤

—施設内での新型「コロナウイルス」感染者発生に備え、積極的に「自主隔離」の訓練をしていますね。

「うちのような障害者支援施設の場合、利用者さんが感染したら、すぐに病院に入院させてもらえません。対応がもたつけば、あつという間にクラスターになる。自主隔離エリアを作つて、感染者のお世話を続けることで、時間稼ぎをする。医療の専門家の助けが来るまで、自力で頑張るしかないと考えました」



「せめて年末年始の行事は明るく」と話す栗林和史理事長

—施設規模は、生活者50人、通所者10人ほど。これですろえた備品は、どれくらいですか。

「今後も増やしますが、現時点で段ボールベッド20組、医療用カウン、キャップ、シユーカー

パーを各2千枚、手袋2万8千枚、マスク1万枚、非常食200食。さらに消毒液や、せっけん、トイレトペーパーなどの日用品が半年分です。職員が感染した時も、必要があればここで助けます」

—それらの購入資金はどうしたのですか。

「厚生労働省の助成制度を使いました。入所施設120万円、グループホーム40万円、就労施設35万円などを積み上げると200万円弱になります。足りない分は、こつこつためた内部留

保を取り崩すと決めています」
—行政や業界に対して要望などありますか。

「町内外の感染確認情報をスピーディーにほしい。どこにリスクが潜んでいるのか知りたい。心苦しいですが、1人目の感染者を出さないため、施設の利用者さんは現在、外出、外泊が禁止です。高齢者も多いですから、それでも出かけるのをえない用事はできます。ところが行政機関に聞いても、何ら答えてくれません。個人情報を守りつつ、リスクを伝える方法はいくらでもある。業界内での情報共有も、もっとできると思います」
—外出、外泊禁止が続くのはつらそうです。

「利用者の家族も心配されるので、もう10回近く封書や写真を送って状況をお知らせしています。せめて年末年始は気の晴れる行事をやろうと、職員と打ち合わせしているところです」

△略歴▽三笠市生まれ。東京農大卒。造園知識を生かして授産施設指導員に。昨年からは現職。南幌めぐみ学園施設長を兼務

(聞き手・土屋孝浩) 〓おわり〓